

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ  
Quarterly magazine FOYER  
2019 summer

001

# FOYER

つながる、ひろがる、あつまる  
ほわいえ



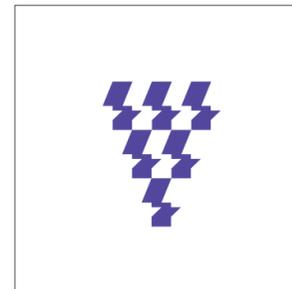
# 劇場ニ広場

創刊記念 Special feature  
熊本県立劇場館長 姜 尚中

芸文祭オープニングステージ「大地のうた」  
総合演出 藤原道山インタビュー

子どもから大人まで一緒に楽しめる作品  
「めみえない みみにしたい」

シンボルマークの  
中にも「広場」



県劇コラム  
広場のHIROBA

平成3年に誕生した熊本県立劇場のシンボルマーク。グラフィックデザイナーの故福田繁雄氏が手がけたデザインで、発表当時福田氏は「私の代表作として完成した」とコメントしています。

このシンボルマークには、芸術をつくり、大きく育て、未来に贈ることを文化とし、この文化をつくりだすのが「人の心」と定義し、県立劇場が「心」の集まる広場として表現されています。よく見ると、人の笑顔でマークが構成されているのがわかります。



【企画・発行】  
公益財団法人 熊本県立劇場  
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971  
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】  
株式会社 ジャム  
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017  
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2019 summer 発行日:2019.6.20 ※掲載内容は6.5現在のものです。



## What is HIROBA ?

Special feature

熊本県立劇場 館長  
姜 尚中 [かん さんじゅん]

劇場という場所のことをイメージする時、外部と内部が明確にわかれた空間、堅牢な建造物を思い浮かべるものです。その内部でも、パフォーマーと観客が舞台によって明確に線引きされ、観客として訪れている人はそこに鎮座して、舞台を観ているというイメージがあると思います。劇場は芸術の殿堂であり、著名な演奏家や世界的なクラシック演奏、舞台にふられる場としての役割があります。もちろん、それはニーズがあり、必要なことです。劇場の中で起きている関係性、イメージを変えていかなければならないという思いもありました。それを伝えていくために「広場」という言葉が出てきました。

広場というものは、遡ると歴史があるもので、ヨーロッパでは広場を中心に教会があり、市庁舎があり、そしてそこにマーケットが開かれ、芸術を楽しむ場があり、人が集まり、その場にあるものを共有する空間です。劇場を広場と定義することで、演じている人、そして観客が同じ空間で、明確な線引きがなく、あいまいな関係性でつながり、そこにいる人たちが全員が「参加」する空間であることをわかりやすく提示できれば、と考えました。参加型の演劇空間でもあり得るし、熊本地震後に開催している「県劇盆踊り」もそうです。ただ広場といっても固定的な概念ではなく、その場、その場を「生」で共有することで生まれるプラスチック的な出来事、つまり同じ公演内容でも、同じ体験を複製できるものではなく、二度と出会えない出来事も含まれます。予想を裏切るもの、予期しなかったこと、偶発的に起きることをエンジョイできるのが、広場そのものではないかと思えます。デジタルの技術が進化し、音や映像はライブのような品質で再現できたとしても、その場で生まれる人間らしさを味わうことは、広場としての劇場でしか味わえないことでもあります。

広場としての劇場は  
観客が参加し、わかちあう場。

2018年に開催した「県劇盆踊り」の様相



「劇場」は、空間を共有し、  
人間らしさを味わう「広場」へ。

## 建造物から自由に。 劇場が外に出向く広場としての活動。

私が県立劇場館長に就任したその年に熊本地震が起き、それから3年という年月は、県立劇場のスタッフたちにとって、広場としての劇場をある意味繕っていかねばいけない状況でもありました。その中で、震災後に各地域を巡回した「アートキャラバンくまもと」や、スタッフやパフォーマーが外に出てワークショップを開くアウトリーチの事業は特筆すべきことです。アウトリーチの事業は震災前から取り組んでいましたが、劇場に足を運ぶことができない方のために、こちらから出向いていく活動は、まさに移動劇場。劇場という建造物から出て、どんな小さな駐車場であっても劇場の空間を持ち込んだ広場になる経験をしました。スタッフにとっては冒険でしたが、集まってくれた人たちからのフィードバックは、仕事のやりがいにつながったと思います。

まず、県立劇場としての次のステップは、私たちの足もとにあるお宝を発見していくような取り組みに注力していきたいと考えています。地域社会の中で失われつつあるローカルなものにスポットをあて、舞台上で披露したり、さまざまな公共施設と連携しながら、有形無形問わず、熊本にしかないものを形として残していくような取り組みです。それと同時に、インバウンドにも注目し、アジアからの来

訪者に向けた魅力的なプログラムの発信にも力を入れていきたい。県民のための劇場であると同時に、外から来た人も楽しめる広場であってほしいのです。そして、青少年の育成を主軸に、音楽、演劇などのジャンルを超え、複合的なアートが共鳴しあうような空間にするために、震災から5年目にあたる2021年には区切りとしての大きなイベントを計画しています。その後には、県劇の40周年も控えています。熊本のさまざまなネットワークが結集できる広場として、県立劇場の活動を展開していきます。

### 姜 尚中

1950年、熊本県熊本市に生まれる。国際基督教大学准教授、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授、聖学院大学学長などを経て、現在東京大学名誉教授。2016年1月より熊本県立劇場理事長兼館長に就任。



第31回熊本県高等学校総合文化祭の会場準備にて

### 公演レポート

## 佐渡裕さんを迎えた 復興音楽祭 「くまモン音楽祭」

佐渡裕さん、アートを拠点に世界で活躍している。



熊本地震の前震から3年目の2019年4月14日、県立劇場コンサートホールで子どもが主役の復興音楽祭「くまモン音楽祭」を開催。熊本日日新聞社とFOR KUMAMOTO PROJECT、県立劇場で取り組んだ3度目の復興支援公演です。ゲストは世界的指揮者である佐渡裕さんとスーパーキッズ・オーケストラ。熊本地震後、何度も被災地を訪れてくれた佐渡さんとスーパーキッズの思いが詰まったステージとなりました。

オープニングでは、くまモンの指揮に合わせて、県内の高校生吹奏楽部メンバーで構成したくまモン音楽祭スペシャルバンドが「365歩のマーチ」を演奏。浦島郁夫熊本県知事も登場し、佐渡さんをお迎えしました。続いて、佐渡さんによる公開吹奏楽クリニックが開講。スペシャルバンドが演奏する課題曲「アフリカン・シンフォニー」を指導。「オーケストラは社会の縮図のようなもの。自分に与えられた役目をしっかりとすることが大切。それぞれの楽器の得意なところが明確に出てくれば出てくるほど面白い。みんなでひとつのハーモニーをつくるんだけど、それぞれの役割は違う

んだよ」との佐渡さんの言葉で、魔法のように音は変わり、一人ひとりの楽器が豊かな響きを創り上げました。

スーパーキッズ・オーケストラのステージではクラシック音楽、映画音楽など7曲を披露。指揮体験コーナーもあり、会場のお客様が指揮する楽しい一幕も！

ファイナーレでは、スーパーキッズ・オーケストラ、くまモン音楽祭スペシャルバンド、菊陽中学校合唱部が共演。佐渡さんの指揮による「花が咲く」「ふるさと」を、みんなで歌い上げました。復興に向かう熊本を象徴する希望あふれる子どもたちの演奏に涙する人の姿が印象的でした。

県立劇場は熊本地震以降、こころの復興支援事業「アートキャラバンくまもと」に取り組んできました。避難所や学校、ホール等でコンサートやダンス・演劇のワークショップ、トークショーなどを無料で行った。その回数は300回を超えました。そんな「アートキャラバンくまもと」の集大成ともいえる公演となった「くまモン音楽祭」。今後も熊本県立劇場は、熊本地震からの復興に資する取り組みを継続していきます。



スーパーキッズと熊本の中高生が共演



## Highlight

子どもから大人まで一緒に楽しめる作品  
『めにみえない みみにしたい』

作・演出 藤田貴大

奥深いテーマに、  
子どもも大人も楽しめる。

子どもから大人まで一緒に楽しめる企画として、演劇作家・藤田貴大さんの演劇作品『めにみえない みみにしたい』を上演します。しりとりの言葉遊びや、しゃぼん玉などを使った視覚効果で子どもたちを楽しませながら、少女の成長や自立、戦争というモチーフにも挑み、奥深いテーマをしっかりと内包した作品で、再演＆全国ツアーが決定しました。子どもから大人まで、心をつかむ本作の秘めた思いを伺いました。

「創作にあたり何を一番意識されましたか？」

子どもにも観せるからといって侮らないことです。大人と子どもの違いは、ボキャブラリーが豊富かどうかだけ。大人と同じように子どもたちも考えています。だから言葉は選びましたが、つくり方は普段と変わりませんでした。

宣伝美術 名久井直子  
宣伝イラスト/グラフィック ユウコ  
宣伝写真 井上佐由紀  
引用/公財福岡市文化芸術振興財団広報誌「w\_a\_01号」より



### めにみえない みみにしたい

日時 2019年8月20日(火)／①開場 11:10、開演 11:30  
②開場 14:40、開演 15:00  
21日(水)／③開場 11:10、開演 11:30  
会場 演劇ホール舞台上  
全席自由 おとな2000円、子ども1000円(4歳～高校生)

### [あらすじ]

おねしょに悩むおんなのこは、飼猫のこにゃあにゃあちゃんから聞いた古い言い伝えを叶えるため、夜の森へ出かけていきます。おかあさんも子どもたちに出かけた森には、たくさんの動物たちや不思議な生き物、妖精たちが住んでいます。森で出会った狩人に案内されて森の奥へ進むおんなのこ。やがて辿りついた古いおうち。となりの森と戦争が始まろうとする中、おんなのこが古いおうちで見たのは……。

劇自主事業案内

## KENGEKI KANGEKI

「今年のオープニングステージ」テーマは「民謡」です。  
熊本県の民謡は、「五木の守守唄」(おてもやん)「田原坂」のように全国に広がっている作品が多く、これまで作品をアレンジし演奏してきましたが、なかなか現地で聴く機会はありませんでした。今回はまさに現地熊本で取り組むので、土地特有の空気感のなかで唄や三味線を聴けるのが僕自身も楽しみです。

「今年のオープニングステージ」テーマは「民謡」です。  
熊本県の民謡は、「五木の守守唄」(おてもやん)「田原坂」のように全国に広がっている作品が多く、これまで作品をアレンジし演奏してきましたが、なかなか現地で聴く機会はありませんでした。今回はまさに現地熊本で取り組むので、土地特有の空気感のなかで唄や三味線を聴けるのが僕自身も楽しみです。

「言葉を選ぶということは、どういうこと？」  
シンプルだったり、直接的だったり。説明が少なくなる分、大人には理解しづらいところもあるかもしれない。しかし子どもたちは物語が飛躍しても想像力で行間を補ってくれます。そういう意味ではいつも以上に自由にフィクションを書けました。

[熊本県芸術文化祭オープニングステージとは？]  
県内最大の文化の祭典「熊本県芸術文化祭」(毎年8月から12月にかけて県内各地で実施)の幕開けを飾るステージ。さまざまなジャンルの舞台芸術をテーマに、県民参加の創作舞台を実施している。

第61回熊本県芸術文化祭オープニングステージ「大地のうた」  
日時 2019年9月1日(日)／開場 13:30、開演 14:00  
会場 演劇ホール／全席自由 2000円  
※25歳以下、障がいがある方は半額

## Interview

第61回熊本県芸術文化祭オープニングステージ「大地のうた」  
総合演出 藤原道山インタビュー

熊本の民謡のパワーを、味わっていただきたい。

尺八演奏家として幅広い活動を展開している藤原道山さん。昨年の熊本県芸術文化祭オープニングステージ「流れゆく水、炎の躍動」では音楽監督を務め、邦楽の新たな魅力を引き出したステージとして好評を博しました。今年度の芸術文化祭オープニングステージでは総合演出として引き続きステージを牽引。藤原さんに熊本の民謡の魅力や、今年度のステージの見どころ聴きどころを伺いました。

「聞いていただきます。加藤清正公時代、細川公時代、明治時代以降と時系列で構成し、熊本という大地に伝わってきた唄のパワーを感じていただきたい。2部は「熊本から全国へ」がテーマ。全国の40ものハイヤ系民謡のルーツといわれている「牛深ハイヤ節」とそこから広がったハイヤ系民謡である「佐渡おけさ」や「阿波踊り」などを聴いていただきます。そしてフィナーレは、民謡歌手の伊藤多喜雄さんによる「TAKIOのソラン節」。現代風にアレンジした民謡で、会場全体で盛り上がりませんか。みんなで楽しめる、参加型のステージにできればと思っています。

「藤原さんご自身の最近の活動について教えてください。」  
若手尺八演奏家とのアンサンブル「風雅竹韻」の活動に力を入れています。私が経験してきたことを若い人たちに伝え、次の世代の人たちもそこからなにかを感じ取りまた次に繋げるといって、リレーのバトンを渡すようなことをしていければと。次の世代を育てることは常に意識しています。

尺八演奏家  
藤原 道山 [ふじわら どうざん]

初代山本邦山に師事。伝統音楽の演奏活動及び研究を行うとともに、マリンバ奏者SINSKE氏をはじめ、チェロ・ピアノなどさまざまなミュージシャンとの共演を積極的に行っている。





## OPEN! BACKSTAGE

コラムでつなぐ交流の場



現在配布している鑑賞マナーのチラシ

### 県劇からのお知らせ 鑑賞マナー

公演はパフォーマーとお客様、そして劇場スタッフが一体となって最高のひとときを楽しみます。それを実現するために演奏や演技の素晴らしさだけではなく、その場にいる一人ひとりの心づかいが必要になります。その心づかいの中でも、とても重要な要素が「鑑賞マナー」です。県立劇場では、お客様に心から公演を楽しんでいただくために、鑑賞マナーのチラシを作成し、主催公演で配布しています。館内にも掲示していますが、鑑賞マナーについてよりご理解いただけるように、チラシのリニューアルを予定しています。現在制作中ですので、お気づきの点があればぜひ劇場スタッフまでお寄せください。

### 県劇スタッフリレーコラム 事務局長 牛島 真吾 [うじま けんご]

## 劇場の コンシェルジュ

県立劇場では、開催される公演ごとに、ホール専属の職員（コンシェルジュ）を配置しています。施設の利用者から相談を受け、公演の成功に向け利用者をサポートすることが主な仕事です。

劇場のコンシェルジュは、利用者とコミュニケーションをとりながら、さまざまな情報を提供し、公演にかかわる問題発生に対して、適切な対応ができるよう、あらかじめ準備し、情報の一元化と危機管理への対応を行いながら、利用の安心・安全につなげていきます。

これからの文化施設におけるコンシェルジュの存在はまさに、求める手と与える手をつなぐ今日的なサービスであり、特に施設利用者への対応におけるホスピタリティの向上に大きな影響を与える仕事だと考えています。



### 舞台さんのお仕事道具 箱馬 [はこま]

箱馬とは木板を貼り合わせて作った木箱のことで、ステージのかさ上げや踏み台、いくつか組み合わせて階段を作るなどさまざまな用途があります。具体的には、歌舞伎や日本舞踊では日本家屋、合唱ではひな壇、ポップミュージックのライブではバンド台、落語では高座を組む際に使用します。

このように、箱馬は舞台仕事道具の中でもバイプレイヤー的存在であり、「縁の下の力持ち」です。

ちなみに、県立劇場の箱馬の大きさは6寸×1尺×1尺6寸です。（1寸＝3.03センチメートル／10寸＝1尺＝30.3センチメートル）舞台では今でもメートル法ではなく、日本古来の尺貫法を用いています。

舞台技術スタッフの仕事は舞台の土台を支えるこの箱馬に重ねて思うことがあり、今日も舞台は馬の背に乗って感動を生んでいます。



### 新しい機材の導入について LED化

2019年2月から3月中旬にコンサートホールの舞台照明の大部分をLED化する、照明設備改修工事を行いました。300灯以上の灯体や電球を更新し、同規模ホールでの大部分のLED化は九州初となります。（演劇ホールも一部LED化しました）

これにより、バラエティに富んだ明かり作りが可能となり、多様な演出に対応できます。また、点灯時にあまり発熱しないため、舞台上の温度変化を抑え、楽器の音程変化を防ぐことができます。その他、消費電力を減らす効果もあります。

県立劇場はこれからもよりよい舞台創造の環境を作ると共に、環境負荷に配慮した運営を目指します。



### あなたの〇〇を見せてください フルート

25年前に購入した、通算6本目となるフルートです。更に自分らしくりくる「相棒」を探そうとしていた時に出会いました。それまで9K（金色フルート）では、9K、14K、18Kなどがあり、数字は金の含有率を示しています（を使用していたのですが、もう少し力強い音が出したいと14Kに挑戦しました。最初は苦労しましたが、しばらく吹き続けていくうちに、だんだん自分の音になってきました。

楽器選びに大事なことは、自分の求める音楽を作りやすいかどうかだと思います。その点、今のフルートは生涯共にと思える存在です。

県劇の中で一番好きな場所は、演劇ホールのオーケストラピット。ピット内の連帯感のある雰囲気がとても好きです。コンサートホールでフルートはステージの中心に座っていますが、客席から見えないピットでのバレーやオペラとの共演にやりがいを感じます。どんな場面でもお客様にとって心地よい時間になるように、これからの「相棒」といふ音楽を奏でていきたいと思っています。

左：フルート(ムラマツ 14Kゴールド) 右：ピッコロ(パウエル シグネチャー)



山口 邦子 [やまぐち くにこ]

平成音楽大学講師  
熊本ユースシンフォニーオーケストラ指導者  
フルートアンサンブル'90 代表  
ラスカーラ・オペラ管弦楽団 フルートを奏者

### 寄稿

#### 熊本市現代美術館館長 桜井 武

クリスチャン・ツイメルマン  
ピアノリサイタル

2019年3月14日  
コンサートホール

2019年3月14日、今、世界で最も高い評価を受けているポランド出身のピアニスト、クリスチャン・ツイメルマンのピアノリサイタルが、熊本県立劇場コンサートホールで開催されました。演奏は、ショパンの4つのマズルカから始まり、ブラームスのピアノソナタ、再度ショパンの4つのスケルツォと進み、アンコールで弾かれたブラームスの2曲のバラードまで見事な統一感を持ち、考え抜かれたプログラムでした。19世紀ロマン派の絢爛たる楽曲が21世紀の現代、ここ熊本の地で、今を生きる人々のために、最高のピアニストによって演奏されました。150年以上前に作曲された楽曲は、全く自然に現代の人々と結びつき、現代、そして未来の音楽を予兆させる響きを感じさせるものとなりました。満席のホールの中は、最初から最後まで、観客が生み出す緊張感で満ちていました。そして、その緊張感、高揚感、歓喜を共有した一体感は演奏が終わっても続き、劇場を出た観客の皆さんが家路につく最終の臨時バスの中ですら目に見えるようでした。

熊本市現代美術館の桜井武館長は2019年6月4日に逝去されました。ご専門の美術のみならず音楽や演劇、舞踊などへの造詣が深く、県立劇場でも文化事業評価委員としてさまざまなアドバイスをいただいております。謹んでお悔やみ申し上げます。